候。書物於無之者、主人可爲越度候事。
一、給人并代官當知行百姓召遣候共、知行替在之者、三ケ年以來之ものを其在所に可殘置、及四ケ年候はゞ其主人可召仕。自然百姓を不遂、又於致奉公は、先主に可相付事。
一、用水之事は、昔之水通(ヨカ)相絶於不通は、誰々雖爲知行所、當給人に相理、其地如本年貢相當之井料を出、新水通(ヨカ)をほるべき事。
一、父子・兄弟讓之事、兄は不及論、若弟并他人に於讓置者、可爲證文次第事。
一、田畠界目之事は、縄打候て可爲如相定時事。
付、山野堺目は、能登・加賀は利家御入國以來、越中は利長入國以來可爲如有來事。
一、公事人、奉行中より日限を究可罷出旨申付候處、遲參之者非分に可定事。
一、公事聞之内に而理非決斷之儀は、可多分付事。
一、非公事をかまへ候者、批判之上、奉行人爲負之者申沙汰するにおいては、可爲曲言事。
一、公事錢者訴・論共三百疋宛持參、理運之方者手前之三百疋可返遣事。
右之條々定置所如件。

慶長六年五月十七日　　利長　御判

二　在々百姓之儀御定追加

追加

一、百姓其村よりかまひなく他所へ在付候族、此以前之儀者不及改、向後者給人代官に相斷、同意之上養子緣邊に可令契約。若私として申合、他所に於相越聟者、双方共可處越度事。
一、加州能美・江沼郡走百姓之儀は、入國以來互に可令沙汰事。
一、走百姓抱置村々、家別出來高三分一、逐電百姓之給人可取之、三ケ二は可爲藏納。未進三分一より過候はゞ、逐算用、殘三分二之内を以給人に可遣之事。
一、此法度以前逃散之百姓者、不及屆可召返。右之家別者取間敷事。
一、逃散百姓、自今以後者聞出次第其在所へ預置、其上給人に屆可召返事。
一、一年限之奉公人契約之事、其出候月より十二ケ月を定可罷出候。但法度以前之儀者、可爲互之約束次第事。
一、侍・小者并百姓、金山に罷越儀、堅可令停止事。
一、一年限之下人給、年中十二俵たるべし。但春之取替五俵、歳之暮七俵可出之事。
一、走百姓かくれ居候村にて女を求在之所に、給人より相屆、本在所に歸候時者、妻子共に可召連之事。

以上

慶長七年三月廿六日(六イ)　　利長　御判

三　在々百姓之儀新追加御定

新追加

一、在々百姓・町人出入雖在之、其代官・給人公事場へ出候儀令停止事。
一、侍共之雖爲公事、双方一人充可罷出候事。
一、公事場へ出候者、不寄誰々、刀・脇刺を置可罷出候事。
一、在々田畠并野山之境出入於有之者、近郷百姓召出相尋、其上明鏡就無之者、檢使を遣可相極事。
一、喧嘩者公儀可爲(ヨカ)御法度之、家財之儀者當座に押置、隣三間に可預置、後日に理非之輕重遂穿鑿、非分之方迄越度可申付事。
一、奉公人と町人、商賣之儀に付於町中出入在之ば、奉公人可爲越度候。但奉公人遠而申分就有之は、令穿鑿理非輕重可申付事。
一、借用仕者之儀、不寄奉公人・町人・百姓、如申定可致沙汰。自然如在仕者雖有之、代官・給人無屆、理不盡に其身を就捕置は、可爲越度事。
一、夜中に往行之女を捕出入於有之者、理非不立入、其男可爲成敗事。
一、馬・牛賣買之儀、相究上にて三日過候はゞ、如何樣之雖爲曲馬、馬主へ返遣候儀可停止事。
一、不寄侍・地下人、或公事匠(巧)、或證據無之儀構虛言、公事場に罷出候聟者曲言に可申付候事。
一、公事篇各令裁許、理非相究、書付を出上、重而遂變申聟於有之者、曲言可申付事。